



「一期一会」の素晴らしさを実感… 高松宮全日本軟式野球大会に接して

「高松宮賜杯第四十五回全日本軟式野球大会・第一部」は、平成十三年九月二十一日から四日間、中標津・別海・標津・羅臼の各町宮野球場に別れて、それぞれ第一試合が始まったのである。

私と家内、隣の阿部俊勝君、スナック「夢夢」のママの四人で、応援してやることになっちゃった。

東京鷲宮製作所のチームは、第一試合が、別海町宮野球場になっていた。試合開始は十二時四十分。沖縄県の代表で、オリオンビール名護工場チームとの対戦であった。「大ママ！俺、車で先に行くからな。三人であとからこいや」

「アラ、なんで先に一人でなんかア…」

「東京のチームの前に、別海のチームが、和歌山県代表とやるんだわ。昨日の開会式で、佐野町長と会っちゃったし、俺も中標津の住人としては、地元の応援はしてやらんとなア…」

「まあね、じゃあ、お先にどうぞ」

十時二十分開始の第一試合。別海町の本町にある、陸上競技場裏に、キャンプ場と並んで町営の野球場がある。この大会は、ABCDEFの五つに別れて第一試合が行われる。別海町宮野球場はF会場であった。球場の入り口に、お

祭りのときみたいに売店が並んで土産物とビール、ジュース類、芋だんご、焼き鳥などを売っていた。着いたのが十一時過ぎていたので試合はすでに始まっていた。

「ありやあ、牧野先生でないかい？ どうもどうも」

どっかで会ったことあったような人だったけど思い出せない。

「やあ、どうも。あんたも今日は応援かい？」

「うちの娘の婿が今日の試合に出るのさア。一族郎党で応援にきたんだわ」

「ほう、別海代表チームの選手とはスゴイね。で、どこ守ってるのさ」

話ながら考えても誰だかなかなか思い出せない。

「センターで六番打ってるみたいだわ」

「そりや大したもんだ。応援、力入れんきゃな。俺も応援するぞオ」

「ところで、今月、三十日の文化祭のときの先生の講演、みんなが楽しみにしてます。よろしくお願いますね」

「ああ、そうよな。こっちこそよろしく頼むわ」

そうであった。別海町上風連地区の会長、安部政博君だったのだ。

「おや！牧野先生、応援にきてくれたんですか？ご苦労さんですね」

この人は知ってる。

「ありや、小崎ちゃん！あんた胸に勲章なんかつけて、また、なにやってんのさア…」

「いやあ、私、この大会の係なもんでね」

毎年、暮れに佐野町長が開催してくれている忘年会で、葛西教育長と一緒に飲んで唄う仲であった。この小崎良一氏は、別海町軟式野球連盟の会長さんであるそうなの。

「そりや、ご苦労さんは、あんたの方だわ。それにしても、別海チーム、なかなか頑張ってるじゃないかい。まだ0対0だもんな」

三塁側スタンドには別海町の応援団が四、五十人はいる。二塁側を見ると、なんと三、四人であつ

た。和歌山県の打出町という町から、はるばる北海道へきて、全国大会に出場したのに…。淋しい限りである。私が一塁側のスタンドへ行ってみると、

「あれ？ 牧野先生！ なんでまたア

…」

一塁側応援席の三、四人はやっぱり接待をする町である気遣いで、

葛西教育長と森田収入役であった。

「試合開始の始球式、町長が投げるんでないの？ その応援にきたんだわ」

「ありや、町長は出張で…。それにとこの球場も始球式はやらんそうですよ」

「あれ、なんだ。そうなのかア…」

「そんじゃ、なにも俺一人が早くこなくてもよかつた。別海チームの攻撃だ。私は大声をあげた。

「二十二番、ササキキッ、打てエー」

「アレ？ 先生、あの選手知ってんの？」

「上風連の安部君の娘婿だつた」

「おや、私より詳しいんでないの」

「そりやそつだ。あんたに頼まれた、上風連の文化祭で講演やるんだもん」

「あ、そうかア。よろしく頼みます」

北海道の代表でもない、地元の

接待チームとの対戦だから、「和歌山レンジャーズ」としては簡単に仕留めるつもりでいたようだった。が、なんと「別海球友」が逆転しちゃったのだ。しかも、その嬢さんが打つちゃった。

「やったア…」

二塁にいた選手がホームに突っ込んで「ウーッ」。試合終了のサイレンが鳴った。

「バンザイッ、バンザイッ。教育長！ おめでとう。よかつたア

…」

三塁側のスタンドも大騒ぎ。

まさかの逆転勝ちである。それにして、こりやちよつとまいつた。次の試合は、私たち四人が応援する東京チームと沖繩チームなのだが、勝つた方のチームは、今勝つた「別海球友」と村軋しなきや

ならない。「なんとも無理して勝

たんでもよかつたのに…。接待チームなんだからよオ」せつかく勝つた別海チームに悪いけど。

「大ババア…。きたわよオ」

いよいよ我が応援団の三人がやってきた。十二時四十分、試合開始。一塁側のスタンドは、沖繩

オリオンピールの応援席。十数本の

広告旗が八タ八タとひらめいて

いて結構にぎやかな感じがする。応援団は十四、五人はいた。それに村する三塁側のスタンド、東京鷲宮チームの応援団は、なんと、我々四人だけ。淋しい限り。

「四人で大つきい声あげて、頑張るべエー」

阿部チャンが気炎あげると

「私なんか、口先労働者なんだから、しゃべるんだつたら、まかし

としてエ…」

と夢夢ちゃん。大ママも、

「あなた、大つきい声でしゃべつたつて駄目よ。応援、ガンバレエー」

会場の入り口で大ママが買ってきた缶ビールと焼き鳥で、もう盛り

りがつてい

「オイッ、選手の名前書いた紙、

持ってこい！」

応援席の一番前から首を出して

三塁側ベンチの中に声をかけると、赤見真季ちゃんという可愛いマ

ネージャーが、ノートの切れっぱ

しに、カタカナで書いてある選手

の名簿を持ってきた。

「スイマセン！ よろしくお願いまーす」

打順の一番から横書きに背番号

20クロキ、29アオヤギ、1カワグチ、27アキヤマ、24スズキ、19トモノ、16フルサワ。

「おお、ピッチャーは二十七番アキヤマだア」

昨日、山盛りのイクラ井を「うめえうめえ」とバクついてた好青年であった。

「アキヤマ！ バンバン行

けエーッ」

第一球の直球、かなり早い。

「ストライク」

審判の手が上がった。

「秋山さん！ いいわよオ。その調子」

大ママも、出ない声を振り絞っている。隣も夢夢ちゃん、

「投げるッ」

「投げてるわよ。頑張れーッ、だ

けでいいんじゃない」

「わかつた。アキヤマ、頑張れーッ」

ピッチャーマウンドの秋山投手

三塁側応援スタンドを見て、ニッ

コリ、ちよこつと手を振った。

オリオンピールも頑張っている。

「ボール！」と審判の声で、

「ホラ、逃げてんじゃないの？ どうってことないボールよ、一発い

守ってるファースト、ササキの野次がなかなかなもの。

「ハイ、打たせていいよ。どうせ、ボテボテのゴロ。腰がひけちゃってるよ」

「バシッ」と打った。サードゴロだ。守備は背番号十六番、ワンバウンドでバツと受けて、サツと送球。なんと二塁側の応援席にボールが逸れて、両手を開いた審判「セーフ」

「こらーッ！ワルサワア、しっかり投げろーッ」

我々四人のすぐ前なもんで、振り返って頭をかいた。初戦はあがるもんだ。

「スイマセン」

「大ババ！本当にワルサワさんなの？その紙、ちよつと見せてもらなさいよ。ホラ、これ、ワルサワじゃないわよ。フルサワよ。古沢さん！しっかりしてよ」

カタカナのフの先が、ちよつと曲がっていた。

ファーストランナーのオリオンピールの選手が、次の投球で盗塁キヤッチャー・クロキのセカンド送球に、シヨートのカワグチがタッチに入ったが、ワンバウンド

送球の捕球は、あぐらをかいてのキヤッチ。またもセーフ。

「こらーッ、カワグチー。しっかり守れエ」

「クロキーッ、いい送球してやれエーッ」

クロキもカワグチも、スタンドを見て手を振る。

「大ババ！そんなに怒ってばかりじゃ駄目！今度は褒めてあげましょうよ」

「よしっ、そうするべ！」

試合は0村0のまま進んで七回に入った。バッター七番の鈴木達也（達也は知事と同じ名前なので忘れない）背番号二十七。第二球を見事に打った。ファーストの頭上を越えた二塁打。それをライトの守備がハンブル。

「スキ！走れエー」

「走れ、走れエー」

なんと、ランニングホームーになってしまった。

「やったア……」

四人が立ち上がって

「バンザイー、バンザイー」

まるで優勝したみたいだ。

ホームベースを踏んでベンチへ戻る前に、我々四人のスタンドまで走ってきた。両手を上げて、

「やりましたア……」

「よオーッ。もう、シャケの尻尾まで行ったア……」

と、阿部チャン。かくして初戦の対沖縄戦は2対1で勝った。

「ウーッ」と試合終了のサイレン。

両チームの選手が審判を挟んで整列。握手を済ませた鷲宮チームの選手全員が、三塁側スタンドの我々四人の前まで走ってきた。監督も、コーチもベンチから出てきた。甲子園球場の高校野球で毎度見ている応援団前のあいさつと同じ形だ。

「ありがとうございましたア……」
全員が帽子を脱ぎ、頭を下げた。

我々四人は、もう舞い上がっている。「バンザイー、バンザイー」

「よくやったわよオー」

「明日も頑張るぞオー」

こんな調子が次の日の第二試合も続いて連勝。準々決勝の「余市ロータスクラブ」にも勝ち、ついに最終日の準決勝戦にまでき

ちやったのである。対戦相手は、優勝候補の 広島県代表・佐川急便中国支社 チームだ。

「オイツ、もしこれに勝ったら準優勝だべや」

「そうよ。準優勝パーティー、やっ

てあげましょうよ」
大ママの一声で決まり。
「そうだな。シャケも持たせることにすつかア……」
阿部チャンも賛成して我が家は明日の昼から、またもゲーデンパーティーをやることに決めた。そんなことから、広島・佐川急便との応援は、四人とも熱が入り、眠が血走っている感じなのだ。朝八時半の試合開始であつても、早過ぎるなどと誰も口から出ない。応援席へ入ったら、選手たちへの掛け声は、明日のパーティーにつながる野次ばかり。いいボールの投球のときは、

「アキーツ、明日はうめエーたらバダア」

ヒットが出たときは、全員が大つきい声で、

「シャケだシャケだ。シャケだア……」
あまりにもおかしな掛け声が、広島赤ヘル（カーブと同じ）チームに響いたわけではないんだろつが、とうとう勝ってしまった。
「やったア……。チャンチャン焼きだア……」
「バンザイー！シャケだア……」
またも、全員が我々の前に整列

して、

「ありがとございましたア…」

優勝でないけど、私はもう泣けちゃった。まったく、みんないい顔して帽子を振っている。

決勝戦は、中標津町営球場に移動しての茨城県取手市の「倶楽部メインズ」というチームとの対戦であった。九州、四国、静岡の各県代表をなぎ倒して勝ち上がったきた強豪である。甲子園出の十九歳と二十一歳のピッチャーが継投する。東京の予選から連投、連投の秋山投手、腰の痛みも出たか、とうとう二ランホームーを打たれたの試合終了であった。それにしても、よくここまで戦ったものだ。そして、翌日は準優勝祝いの大パーティーである。

「おめでとー！よく頑張ってくれたア…」

「ご苦労さん！」

「さア、今日はたっぷり食べてくれエ！約束のデックシャケ、明日必ず送ってやつから、みんなちゃんと住所書いとけよ！」

と、阿部チャン。

「どうぞオ、タラバの茄でたてよ。こんな大きいのはちよつとないのよ。」

と、大ママ。

「ホツキも焼けてるわヨオ…」

「シャケのオニギリ、三十個も作ってあるわよ」

大ママも今日は、標津から友だちの梅野夫人、美恵ちゃんが手伝いにきてくれているので、腰の痛いのかなか、どこ吹く風と大張りきりだ。十五人の東京組はただだ、「うわア！」

「おいしい。嬉しい！」

の大合唱。我が家のペランダにセツトしたカラオケも始まって、飲んで、食って、唄っての大パーティーになった。

マイクを取って俺。

「諸君！やってみるかア？」

「やってまーす！」

「みんな、ホントによく頑張ってくれたなア…。ありがとよ！俺、今まで、こんな楽しい野球は初めてだア。五日間ものあいだ、怒鳴って、騒いで、喜んで、金では買えない嬉しさを君たちからもらったんだ。応援し続けた俺たち四人は心から、やってよかったと思ってるよ。なア、大ママ！阿部チャン！夢夢ちゃんよオ、な、そうだベエ？」

「そうよオ。よかつたわア…」

「最高だったア…」

「アキヤマ！唄えエー」

ますます盛り上がった数時間。とうとう、サヨナラの飛行機の時間がきた。

あのゴツイ阿部ちゃんが、十五人、ひとりひとりと別れの握手で泣いている。それを見る俺も、自然に涙が流れてくる。マネージャーの吉野弘子ちゃんが、大ママの首にしがみついて、泣きじゃくる。

「大ママア…」

背中をトントン叩きながら、

「元気でね。アリガトウ。よく頑張ったわね。ご苦労さん！」

まるで、映画のラストシーンであった。

そして、三台のレンタカーに乗った選手たちは、別れを惜しみながら、手を振り、帽子を振り、車の窓から身を乗り出すようにしながら空港へと消えていった。

昨日、東京から手紙がきた。

こちらへ帰ってきてからも不順な天候が続く毎日です。

さわやかだった北海道はいかがでしょうか？

過日は、不慣れた私たちのためにいろいろと親切にしていた

だいたり、ご馳走になったりと、

本当にありがとございました。

そのつえ、皆に上等な鮭を早速お送りくださいます、重ねてお礼申し上げます。

お世話になつたばかりか、このようなことまでしていただくとは…と、一同恐縮しております。

大きいので塩にして親戚中におすわけしたとか、うちではムニエルにしたとか、職場が鮭の話で盛り上がっています。

目標の優勝はできませんでしたが、長期の滞在になり、思いもかけない先生方との出会いで、楽しい北海道の思い出ができました。

マネージャーとして私が代表でお礼状を…ということになりました。皆、くれぐれもよろしく伝えてほしいと申しております。

株式会社 鷲宮製作所

軟式野球部 マネージャー

吉野 弘子

読んでるうちに、涙で字が見えなくなっちゃった。

さわやかな涙ってゆづのは、こんなのなんだろうねえ。